

「まなづる海の月報」は、町立遠藤貝類博物館が昨年8月から発行している地域の海のかわら版です。昨年度に続き、今年度も船の科学館「海の学びミュージアムサポート」の助成により発行させていただくことになりました。発行にあたっては、真鶴町漁業協同組合、岩漁業協同組合(岩ダイビングセンター)、横浜国立大学大学院 環境情報研究院附属臨海環境センター、特定非営利活動法人ディスカバーブルーをはじめ、真鶴の海で活動している多くの皆さまにご協力いただいています。海の月報は、過去の巻号も含め、町立遠藤貝類博物館ホームページからダウンロードいただけます。プリントアウトしてお近くで掲示していただくのも大歓迎です。ご協力のほどよろしくお願いたします。なお、来月からは毎月月末頃の発行を予定しております。

トピック まなづるの海

コククジラの子どもが三ツ石海岸に漂着



4月11日に三ツ石海岸東側に打ち上げられたコククジラの子ども(上・左中)。全身が白くのは、死後、時間の経過により変色したため。町立遠藤貝類博物館の入口付近に展示してあるクジラの骨格標本(左下)。これもコククジラであることが判明しました。

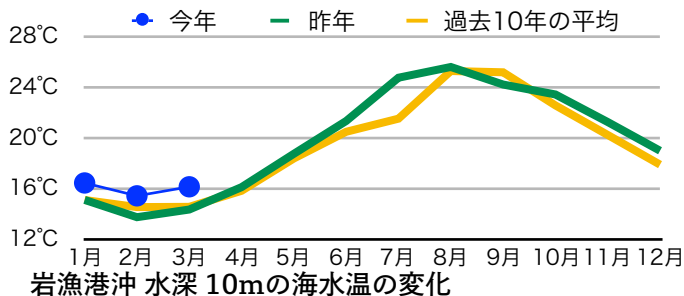
4月11日、三ツ石海岸の東側に、全長約9mのクジラの死体が漂着しました。死後かなり時間が経過していたようで、白く変色していた状態でした。18日には国立科学博物館による調査が行われ、このクジラがコククジラであると確認されました。コククジラは沿岸の浅い海域で暮らすクジラで、北太平洋の東側と西側に生息しています。東側のアメリカやカナダの沿岸では数千頭が確認されていますが、西側の日本、中国、ロシア沿岸の個体群は、過去の捕鯨などの影響で150頭程度まで数を減らして、絶滅が危惧されています。コククジラは赤ちゃんで全長4.6-5m、体重500kg、成体では全長12-14m、体重16-33トンになり、離乳時は全長8.5m程度とされています。今回の個体はオスで、体長から1歳半程度と推測されました。この個体は国立科学博物館などの研究機関によって解体され、貴重な標本となりました。

解体作業のかたわら、遠藤貝類博物館に展示しているクジラの骨格標本(2009年に岩漁協から寄贈されたもの)を見ていただいたところ、この個体もコククジラで、1歳程度であったことが判明しました。近年、伊豆諸島でコククジラが目撃が相次いでおり、真鶴近海は伊豆諸島から北へ向かう回遊ルートになっている可能性があるそうです。<情報提供：国立科学博物館、参考：国立科学博物館海棲哺乳類データベース>

真鶴の海況

海にも春の訪れ 海水温が上がり始める

2月の平均海水温は15.4℃でしたが、3月は16.1℃で、春の訪れとともに海水温が上がり始めました。この冬は例年より海水温が暖かく、3月の海水温も高めでした。このまま例年より高い状態が続くのか気になるところです。<データ提供：横浜国立大学>



真鶴の漁獲情報

春の魚サワラなど様々な魚が水揚げ

4月はサワラと、そのこどもで小ぶりのサゴシが多く水揚げされました。特に上旬には1日で2500本が入った大漁の日もあったそうです。その後も、マサバ、アジ、スルメイカ、タチウオ、キンメダイなど、食卓でも馴染みの深い魚たちが春とともに訪れ、年明けの不漁が嘘だったかのように賑わいを見せています。今回写真でご紹介するのはサワラ。サワラは本来1年中獲れる魚ですが、瀬戸内海では4月頃に外海から来る個体が水揚げされるようになります。春の訪れを告げる魚、「鱈」という漢字が当てられるほど、古くから日本の食文化に根付いている魚です。体長50cmまでの個体はサゴシと呼ばれます。身は細長いため捌きやすく、小骨も少なく、淡白で上品な味で、刺身、焼き魚、煮魚などを始め、様々な料理に適しています。今回は新鮮なサゴシをお刺身と焼き魚で美味しくいただきました。<情報提供：真鶴町漁協>



サワラ(サゴシと呼ばれるサイズの個体)

2019年5～6月の町立遠藤貝類博物館のイベント

- 5月19日(日) 海のミュージアム「磯の生物観察会/海の自然実感教室」
三ツ石海岸・町立遠藤貝類博物館【有料】
- 6月 2日(日) 海のミュージアム「磯の生物観察会/海の自然実感教室」
三ツ石海岸・町立遠藤貝類博物館【有料】
- 6月22日(土) 海のミュージアム「磯の生物観察会」
三ツ石海岸・町立遠藤貝類博物館【有料】

まなづる 海の月報は、町立遠藤貝類博物館 HPからダウンロードができます。プリントしていただいで掲示・配布歓迎です。